

生涯学習カウンセリングの基礎理論

著者	谷川 幸雄
雑誌名	北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	1
ページ	127-142
発行年	2001
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000683/

生涯学習カウンセリングの基礎理論

Basic Theory of Lifelong Learning Counseling

谷 川 幸 雄

Yukio TANIKAWA

I は じ め に

これからの授業では、知識・理解、技能の基礎・基本を大切にしながらも、児童生徒の関心・意欲、思考力・創造力、判断力、表現力等を重視し、児童生徒一人一人のよさや可能性などを積極的に生かしていくことを重視することが大切である。

これまでの授業では、習得させたい認知的事項を学習の目標として授業の過程に位置づけ、それを如何に効果的に習得させるかということに精力が注がれてきたように思われる。しかも、学習の効率化は、教材内容の系統性、論理性を重視して教師の想定した思考過程に基づいて展開する直線的、単線的な思考活動の中で求められてきた。このような学習環境・条件の中では、児童生徒の興味・関心や意欲を醸成することは困難である。

児童生徒一人一人の思考過程や発想を大切に、螺旋的、複線的に思考活動が展開される授業が大切である。

一方、今多くの大学でも授業評価を取り入れるなど授業改善に努めている。著書「授業を変えれば学校は変わる」(著者 安岡高志ほか、プレジデント社 1999)の中で、学生を引きつける授業とはどんな授業か、授業評価こそ教育改革の柱である、21世紀を生き延びる大学とはこの先生の授業を受けてよかった、授業する教師の側にも充実感があるような、そういう理想の大学を一つのシステムとして機能させることである。など多くの示唆を与えている。

また、著書「大学の崩壊」(野田一夫 鶴川昇芝著、IN 通信社、2000)の中で、いくつかの提言をしている。その一つに「講義を通して学生に目標をもたせる。大学での学ぶ喜び・感動を与える。学生に自信をもたせる。」ことを基本に据えた授業を展開することが大切であると述べられている。

われわれは、発問一つするにしてもカウンセリングマインドをもって、問題意識を持たせる発問、参加を促す発問、示唆を与える発問、理論の発展を促す発問、評価のための発問など意図的に行うことが大切である。

今回は児童生徒の学習を中心に、学習カウンセリングの姿勢、技法を生かした授業の基本的な考え方についてまとめたものである。

II 学習カウンセリングの意義

学習カウンセリングの定義を明確にしたものはないが、学習とは、「経験による行動の変容」(新教育心理学事典)、「一定の場所でのある経験が、その後、同一または類似の場面での個の行動もしくは行動の変容をもたらすことと言える」(新版 心理学事典)などと定義されている。また学習指導とは、「学習者の取り組むべき問題を学習者自身に明確にさせ、その取り組みを見守り、それを援助・指導し、発展させる」と考える。一方、指導上の観点としては、学習意欲、学習環境、学習への興味・関心、学習技能、学習習慣、学習態度が挙げられる。

学習カウンセリング (counseling of Learning) とは、「一人一人の学習者に対して、学習のつまずきや悩み等、学習上の諸問題について共に考え学習への興味・関心を醸成し、取り組むべき問題を学習者自身に明確にさせ、自己学習への援助を図ろうとするものである」と定義したい。したがって、学習とカウンセリングとは、銀貨の裏表の関係にあると言える。

1 学習カウンセリングの基本的な考え方

優れた教師は高い専門性と優れた人間性をもっている。この両面性を兼ね備えた教師から声をかけられた児童生徒はそれだけで「頑張ろう」「努力しよう」と意欲を燃やすものである。

敬愛する教師には心を開き、その期待に応じて自らを高めようと努力するのである。

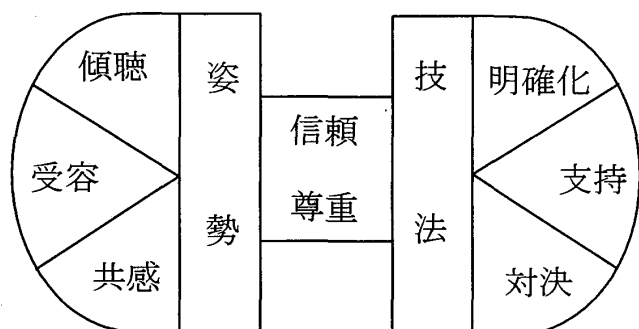
このような師弟関係にあってこそ、教師のことが児童生徒の心の琴線に響き、「信頼・尊重」に満ちた望ましい人間関係が築かれる。

教師はすべての教育活動において「信頼・尊重」を基盤として、カウンセリングマインドをもって児童生徒に接することが大切である。特に学習場面で児童生徒が教師に対して何らかの面で行為をもつとき教師への接近や信頼が高まり学習活動が一層充実したものになる。

「教育という仕事は信頼感が生命である」ことを肝に銘じ、カウンセリングマインドをもってカウンセリングの技法や姿勢などを身に付けることが重要である。

カウンセリングの精神や技法・姿勢を授業に生かした教師像とは、共感、受容、傾聴をもって、児童生徒に接することであり、支持、感情の明確化、対決の技法を身に付けていることである。

図1 学習カウンセリングの構造



まとめると、左の図1のように構造化することができる。

(I) 学習カウンセリングの基本的態度

●共感 (empathy) — 平たくいえば「他者の気持ちをその人の身になって感じ取り、理解すること」である。

英語の語義には相手の中に入りこむ、感情を移入するという意味がある。

このように、他者を外側から眺め、判

断し、分析したり、他者を知的な側面からとらえたりするのではない理解の仕方は、カウンセリングや心理療法における他者理解の本質をなすものである。

つまり、児童生徒を知的に理解したり、理論的に解釈したりするものではなく、児童生徒の内的世界（気持ち、感情、ものの見方、考え方）を自分自身のものであるかのように理解しようとする姿勢が大切である。

このような教師の姿勢・態度に対して、児童生徒はしだいに信頼感をもち、感情、思考、行動が自発的、創造的、積極的な方向へと変化を示しはじめる。

「うん、なるほど、そんなふう考えたんだね……」と言われると、児童生徒は、自分の気持ちがわかってもらえたという満足感が高まり、勇気づけられ知識探求への意欲がわいてくるのである。

さらに、ロージャス (C.R.Rogers) の考えをつけ加えるならば「それは、来談者の私的な感情の世界をカウンセラーがあたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかもそれらの感情に自分自身の類似の感情をからませて相手から巻き込まれることなく、あくまでも自分自身本来の気持ちと相手から伝わった感情とを区別しうることである。」と定義している。

●受容 (acceptance)－これは、来談者中心療法で特に重視させるカウンセラーの態度であるが、大きく分けて次の二つの意味で用いられる。一つは、児童生徒の発表や説明などに評価や判断を加えず、それをそのまま受け取ろうとする教師の応答技法の意味である。「うん、なるほど……」などと相手の気持ちに共感して「あいづち」をうちながら話を聞いていくことである。これは単純な受容 (simple acceptance) とも言われている。もう一つは、応答の技法というよりもっと深いレベルでの教師の受容的な態度や姿勢の意味で用いられる。

ロージャスは、1959年の論文で受容を技法というより態度、姿勢を強調して、「肯定的配慮」という中で触れている。肯定的配慮とは、暖かさ (warmth)、好きになること (liking)、尊敬 (receptance)、同情 (sympathy)、受容 (acceptance) などの態度であると述べている。つまり、受容の概念は、肯定的配慮の概念に含まれることが理解できる。

拒否的ないしは指示的な関係の中では、児童生徒の自己概念は変化するというよりむしろ自己防衛されることが多い。教師は、ややもすると、知らず知らずのうちに、非受容的態度をとっていることもある。気をつけなければならない非受容を表すことばとして

- ①命令・指示＝「文句ばかり言ってないで、さっさとやってしまいなさい」
- ②注意・脅迫＝「進級したければ、今すぐやったほうが良いと思うよ。さもないと……」
- ③訓戒・説教＝「学校は、勉強するのが仕事だよ、やる気がなければ学校をやめていいよ」
- ④助言や解決策の提案＝「もっとじょうずに時間を使えるように、計画を立てなさい。そうすれば、宿題は全部できるはずですよ」
- ⑤講釈・理詰めの説得＝「考えてみよう。いいかい。宿題を提出するまで、もう三、四日しかない。よく覚えておくんだね」

五つの型の典型的な対応法をあげた。さらに三つの型を紹介しよう。やはり不適切な言い方

だか、少なからぬ教師は、これが生徒のためになると思いこんでいる。

⑥判断・批判・不同意・非難＝「君はひどい怠け者だ。さもないとグズだ」

⑦悪口・きめつけ・嘲笑＝「君に当てても無理だな、ザルに水を入れるようなものだね」

⑧解釈・分析・診断＝「宿題やらずにすませるにはどうしたらいいのか、そればかり考えているんだろう」

生徒に気分転換させようとしたり、深刻がらないようにさせようとしながら、実は役にたたないのが、次の二つのやり方である。

⑨ほめる・同意する＝「君は本当は実力がある。工夫すれば、君ならできる」

⑩激励・同情・慰め・支持＝「私もあの宿題は、やさしくないと思っているよ。でも、やりはじめれば、それほどむずかしくないんじゃないか」

生徒が防御反応をおこすと十分承知しながらも、教師は次のように言うこともある。

もっと多くの事実がわかれば、生徒の問題は解決すると思いこんでいるからだ。

⑪質問・尋問・詰問＝「宿題がむずかしすぎると、思っているかい」「どれだけ時間をかければできるの?」「なぜ、もっと早く言ってこなかったんですか」

⑫注意をそらす・皮肉を言う・笑ってごまかす＝「もっと楽しい話をしよう」「そんなことを言っている場合じゃないでしょ」「だれかさんは、今朝は不機嫌らしいな」

●傾聴 (listen) 一児童生徒が、ことばのみならず、体全体で表現しようとしている内容、感情、意図を教師は、心にゆとりをもって静かに児童生徒の心の叫びに耳を傾けて聴こうとする姿勢である。

日常よくある例を次に示す。生徒が職員室に入ってきて、

M子「失礼します、先生」

教師「ん、なんだい」(M子と目を合わさずテストの採点をしている)

M子「あのね……」

教師「ん、それで、なんだ、何でも言ってみろ」(視線はテスト用紙にむけられたまま)

M子「やっぱり、いいです」

教師「うん、用事があったから来たんだろう」

M子「失礼しました」

教師が気がついて、M子を見たとき、M子の背中が見えた

※不信を生む二重のメッセージを出さない

M子は、なぜ、何にも話をしないで帰ってしまったのか、「何でも言ってみろ」と言いながら、姿勢は「聞きたくないといっているようだ」、M子は迷ってしまう。このように相反するメッセージを受けると、どちらのメッセージに従ってよいか迷ってしまう。(二重拘束(Double・Bind)) M子は「先生は忙しいので、私の話を聞く時間がないんだ」と感じとった、先生はM子の行動を奇異に感じている、この矛盾するメッセージを同時に伝えることは不信感を生むことになる。

忙しい中であっては、ややもすると、言葉と非言語的な手段で伝えるメッセージが違ってしまふことがある。これを避けるためには、①児童生徒と話をするときは、目を見て話す、②話すときの態度・姿勢に注意する、③児童生徒の声に応えられない時は、そのことをはっきり告げ、次回に会う約束をする、などの点に留意することが大切である。

※「聴く」ための基本姿勢

- ①話しやすい雰囲気を醸成する＝児童生徒の間に、お互いの意見、説明を尊重する雰囲気があり、教師にも、心静かに、ゆっくり話を聴く姿勢があることが大切である。
- ②先入観をもたずに聴く＝教師の先入観で解釈したり、結論を出したりしないで、心をこめて、最後まで聴くという忍耐が大切である。
- ③思考過程を聴く質問にする＝「はい」「いいえ」という単純な返事にならないような質問を工夫する、そのことによって、児童生徒の考え方や自由な発想を引き出すことができる。
- ④児童生徒の発言を最後まで聴く＝発表や発言が途切れた時は、「考えている」「迷っている」「整理している」「不安になっている」など、いろいろな状態にあることを理解する。
- ⑤勝手な解釈や評価、批評をしない＝一方的な解釈や批評をするのではなく、相手の考え方や気持ちを理解して、児童生徒の一つ一つの発言や説明を大事に受け止める。

(2) 学習カウンセリングの基本的な技法

◆明確化 (clarification)＝児童生徒が発表の最中に適切なことばがみつからず、ことばにつまったり、感情がこみあげてきて、ことばがとぎれて沈黙してしまうことがある。そんなとき教師は、児童生徒の内面にある気持ちや感情を感じとり、あたかも鏡に写して見せるようにことばで返したり、共感しながら的確なことばで表現したりすることを「感情の明確化」(感情の反映ともいう)という。例えば「A君の言いたいことは、こういうことかな……」と返したりする技法でもある。もう一つは、「B君のこの文章は、こういう意味ですか……」と意味の明確化(意味の反映ともいう)の場合がある。

教師は、ややもすると忙しさにまぎれ、あるいは時間を気にして発表や説明の途中で中断して、教師が勝手な解釈をしたり、批判したりすることがあると思う。児童生徒の内面を知ろう、理解しようとする教師の姿勢が児童生徒の心の扉を開くのである。

◆支持 (support)＝児童生徒の言動に対して「You are OK」というサインを出すことを「支持」という。例えば、教師Aが、「だれでもそうですよ……」、教師Bが、「よくできたね、これで正解ですよ」、教師Cが、「君は、今苦しいだろうが、きっと苦労が役立ちますよ」、などと教師が自分の考えや感情を児童生徒に表明することである。

支持をするからには、教師はきちんとした根拠がなければならない。まず、根拠の一つは、今まで指導したことのある「事例」をもっていること(上記Aのような対話の場合)、二つ目は、教科に対する知識等の「理論」をもっていること(上記Bのような対話の場合)、三つ目は、教科の指導や人生経験上様々な「体験」をもっていること(上記Cのような対話の場合)である。

支持ということを強調したのは、児童生徒が授業の中で、教師から支持されることが意外に少ないように思うからである。支持には、その本質がもつ愛ややさしさをもとに、児童生徒の自信や自己受容、自尊感情を高める働きがある。

◆対決(confrontation)＝授業に生かすカウンセリングの技法として、明確化、支持について述べてきたが、このほかに、「対決」という技法が必要である。

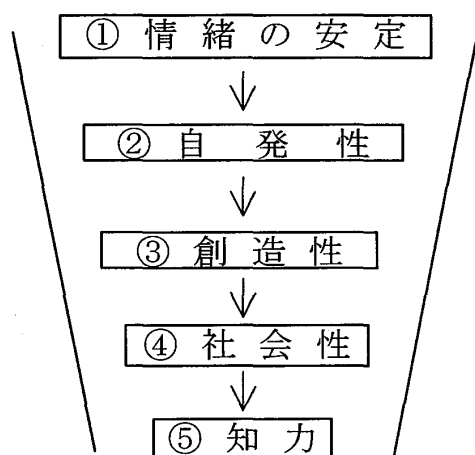
「対決」とは、児童生徒の言動の矛盾、問題解決のプロセスの矛盾などに気付かせ、解決に導く技法である。例えば、数学の授業の中で「うん、ここまで間違いないね、次のここは、どうしてこうなるのかな？どんな定理に基づくのかな……」と指摘することによって、矛盾に気付かせ、あるいは問題の核心に直面させる。そのことによって、児童生徒の知識探求を促進することができる。この技法は、あくまでも信頼関係の上に成り立つものであることを忘れてはならない。大切なことは、児童生徒の正確な理解に基づき、それを大事にしながら対決することである。

また、対決というと、評価的、追及的、尋問的な話し方を連想しがちであるが、そうではなく、観客的に真実(事実)を求めることである。

この技法によって、①思考のはたらきが発動するバネとなる、②思考が進行する方向を助ける、③新しいイメージを着想する刺激になる、④分析したり統合するのに役立つ、⑤応用思考をさせる一助ともなる、などの学習効果が考えられる。

以上、姿勢・態度として「共感」「受容」「傾聴」を、技法として「明確化」「支持」「対決」を中心に述べてきたが、これらの根底をなすものは「信頼・尊重」である。児童生徒相互の信頼関係、先生と児童生徒の信頼関係が樹立されていることが大切である。そして、学習集団が開かれ、お互いに尊重しあえる集団づくりが重要である。例えば、相手の説明をよく聞かない、ひやかすなど、人の心を傷つけるような言葉を厳に慎み、相手の意見を受け入れるような態度がとれるよう指導することが大事である。

図2 児童生徒の成長欲求過程



人は他に受容されてはじめて自己を受容し、自己実現が可能となる。したがって教師の「共感的な理解」—「受容的な態度」—「積極的な傾聴」という条件が満たされれば満たされるほど、児童生徒の心は満たされて目の輝きとなって表われ、自発的な表出が促進される。その過程で児童生徒は自己理解の深化、課題の洞察、解決へと進むことができる。それは、児童生徒が主体となった学習の基盤となるものである。

この教師の共感的な理解—受容的な態度—積極的な傾聴は、児童生徒の成長欲求を左図のような階段で満足させていく。

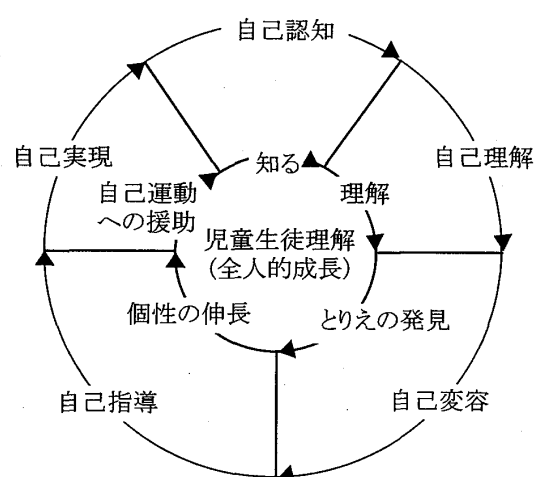
- ①学級（教室）の雰囲気、授業の雰囲気に親近感や信頼感が高まることによって安心する。
- ②情緒的安定は自発性を生み、進んで学習に取り組むようになる。
- ③種々の体験を通して、思考していく過程で、創造する喜びが生まれ興味、関心が高まる。
- ④学習は、結果の正否よりもその思考過程を尊重し、工夫や努力を意義づけていくことによって、学習集団の仲間として心理的に確固とした位置をもち、社会性を身につける。
- ⑤知識注入的な授業ではなく、知識探求的な授業によって知力を伸長し、自己運動が活発化し、自己実現に向かっていく。

授業では、学力と人間性の成長が同時に培われていく。授業における「共感」「受容」「傾聴」は、教育の人間化を図る必須条件である。

2 児童生徒理解と学習カウンセリング

(1) 児童生徒理解の基本的な構造

図3 生徒理解の構造



左の図3は、児童生徒理解の構造を示したものである。内側の円は教師の行動である。**知る**—名前、出身学校名や活動状況、家庭状況、交友関係等、一人一人の児童生徒を把握することは、授業に臨むに当たって基本的条件である。そして、これらの事項を記入する「学習指導カード」等を作成することも児童生徒理解の上で重要である。**理解**—資料を収集し、総合的に把握し、それを多面的、多角的に見ることによって、児童生徒の内面を理解することができる。

そこから、児童生徒の**とりえの発見**をし、それを伸ばす、すなわち**個性の伸長**を図る、そして、

一人一人の児童生徒が、自ら考え、判断し行動できるように援助していく。これらがスムーズに回転移動すれば、外側の円（児童生徒の心の動き）は自主的に動いていくのである。

(2) 児童生徒理解の基本的な考え方

- ① 児童生徒を客観的に理解する
- ② 児童生徒を内面的に理解する
- ③ 児童生徒を多面的、多角的に理解する
- ④ 児童生徒の独自性を理解する
- ⑤ 児童生徒を共感的に理解する
- ⑥ 児童生徒を螺旋的、累積的に理解する

① 児童生徒を客観的に理解する

自分に合う子はよい子、合わない子は悪い子という考えを改め、事例研究会などを通して多くの先生の手で客観的・統合的に児童生徒を見ることが大切である。

② 児童生徒を内面的に理解する

教師は常に児童生徒のこころの叫びに耳を傾け、児童生徒の深層的悩みを理解しようと努力

することが大切である。

ある日、女子生徒が「先生、数学、解らないところがあるので教えてほしいんですけど、いいですか」と言って相談室に来る。「いいよ」、彼女は問題集を開き、「ここです」「じゃ、一緒に考えてみようか」といって問題を解きはじめて、しばらくして彼女の顔を見ると問題に集中していないことが解る。「疲れたね……少し休もうか」といってコーヒーを飲みながら話をしていると「先生はどうして先生になったんですか」という質問が出た。

このことから解るように、彼女の「深層的な悩み」は自分が先生になりたい、しかしなれないかもしれないという不安である。数学が解らないというのは「周辺層の悩み」である。もしこのとき「もっと問題に集中しろ」と叱ったとしたら彼女の内面を理解しないまま別れたかもしれない。非言語的表現に細心の注意を払って観察することが大切である。

③児童生徒を多面的、多角的に理解する

直円錐を正面から見れば二等辺三角形に見えるでしょう。真上から見れば円に見えるでしょう。即ち見る角度が違えば形は違って見えます、児童生徒も色々の角度から観察し、接して行くことが大切である。

④児童生徒の独自性を理解する

ある日、男子生徒が相談室に来て「先生、おれ頭にきた」と興奮して話する、「なにかあったの」と聞くと「進路相談で、進学先を聞かれたのでA大学と答えたら、『受検料の無駄だ、K男でさえ、A大学はCランクだぞ、入るわけないだろう』といわれたんです。俺だって、K男の実力は知っている、なにもK男と比較して言うことないと思うんです」つまり、他者と比較して本人の価値をきめてはならない。本人の個性や一人のかけがいない人間として尊重することである。

⑤児童生徒を共感的に理解する

ある生徒がガラスを割って職員室に入ってきた。その先生の第一声は「ばか者……」ではなく「〇〇くん大丈夫だったか」であった。生徒はボケーっとしていた。「怪我しなかったか」と聞いたのである。次に「どうして割れたの……困ったな、弁償だな……」「はい弁償します、すみません……」このように相手の気持を受容することが大切である。共感的に理解することは、甘やかすことではない。弁償すべきものは自ら処理するのである。

⑥児童生徒を螺旋的、累積的に理解する

児童生徒を、一方的、直線的に評価してはいけない。一部分を捉えて決めつけたり、人格まで否定してはならない。目に見えるのは氷山の一角である、その水面下にあるものを知ることが児童生徒を理解する上で大切なことである。それがカウンセリングの役割である。

Ⅲ 学習カウンセリングの具体的なすすめ方

先生「君の成績では、T大学を受けても無理だよ。」

A子「でも、一応T大学を受けたいんですが……。」

先生「無駄なことは、やめたほうがよいと思うよ。」

A子「そうかもしれないけど……。」

先生「家庭で何時間勉強しているんだ。」

A子「30分から1時間くらいかな……。」

先生「そんな勉強時間でT大学に入るわけがないよ、B子は、家で3～4時間勉強しているのにそれでもボーダーラインだよ、B子と比較してもわかるだろう……。」

A子「すぐ、眠くなるんです。どうしたら、眠くならないのでしょうか……。」

先生「それは、君の意志がよわいからだよ、強い意志をもってやるしかない……。」

A子「それは、そうですが……。」

先生「学ばざるもの、食うべからずだよ。」

このような面接場面が以外と多いように思われる。この面接場面では、学習者（A子）の取り組むべき課題を学習者自身に明確にされていない。

1. 自己学習力を育てる学習カウンセリング

自己学習力という概念の定義には、種々の規定の仕方があるが、少なくともそれは、自己向上を目指して、自主的、主体的に学習を進めていく能力、態度、習慣を含んだものとして規定され则认为。それには、つぎのような特性を含んだものと言える。

- 内発性—学習への方向付け、学習活動の喚起と持続が、学習者自身の内的欲求に基づいて内発的に動機づけられているものであること。
- 自律性—学習課題や目標の設定、学習方法の選択などが自らの判断によってなされること。
- 志向性—学習が、自己の知識や技能の向上、ひいては自己成長を促すという価値に志向したものであること。
- 歓喜性—学習活動が、苦悩を通しておもしろさや楽しさがわかるものであること。

このような特性は、児童生徒の発達段階に応じて、その優位を考えて自己学習の育成に努めることが大切である。

そのためには、どのような学習カウンセリングが大切か、次にその一例を示すと

ア まず、表1に「学習のつまずきチェック項目」を用いて学習者と共に考えチェックすることから始める。（P11参照）

イ 青、赤の2種類のカードを用いて「良くてきていると思うもの」青カードに記入、「良くてきていないと思うもの」赤カードに記入する。

ウ 次に、青、赤のカードを、「良くてきていないと思うもの」の中でも、学習上大きく影響し

ていると思うものから順に番号をつけていく。同じように「良くできていると思うもの」の中でも最も良くできているものから順に番号をつけていく。

そこから学習のつまずきの原因を探り、学習方法を改善し、学習計画をたてる。そこである期間実施し、その後、点検し、修正して再実施に移していく、その過程で勇気付けや支持をしていくことによって、学習者が自己向上を目指して自主的・主体的に学習を進めていく能力、態度、習慣などが身につき自己学習力が高められる。

これをグループ（4～6人）で行うこともできる。ダイナミックス（力動性）なカウンセリングを通して学習者同志が励まし、勇気づけあっていくことによって人間関係がより深まっていき思いやりの心や協調性が醸成されていくのである。

このように、学習カウンセリングを取り入れた授業展開を進めていくと、多くの生徒に変化が見えてくる。

学期末には、「反省と展望」という題名で6項目ほどの設問があり、それぞれの生徒が意見、反省、新年度の希望などを書くことにしている。その一つに「授業について」の項目がある。この項目について生徒の意見をいくつか紹介しよう。

Kさん：数学は科目が科目だから、家庭でも、授業でも怠けていけないことは、よく分かっていたけれど、家庭学習はどうしても怠けがちだった。しかし、特に数学の授業中は怠けたくても怠けられないような（うまく言えないけど）、勉強したくなくても、自分でも知らないうちに身を入れてやっている、そんな授業展開だったのでもともと良かったと思います。

I君：新学期になって先生の授業を受けるようになり、よく名前を呼ばれて当てられたり、よそ見をしていると当てられ、授業態度も変わったように思う。先生の話聞いていたらだんだん解ってきて問題を解くのが楽しくなった。難しい勉強の合間に先生が教科書だけでは学べない色々なお話をしてくれたので勉強の嫌いなぼくにとって好きな授業になりました。

Hさん：先生の授業は解り易かった、解らないところは、良く聞いてくれたし、問題演習はグループで学習して教え合ったのでよく理解できました。数学に対する劣等感のようなものがなくなってきたのが、一番の収穫だった。

Aさん：先生は、最初の授業時間に教科書の問題だけでも1200題はあるので、一人平均すると25題当たるよといった、一年間終わってみると、私は40題以上当たったように思います。もちろん問題集の問題もあったので、数学の授業がとても好きになりました。

中学の時は数学が一番悪かったけど高校になって数学が一番良くなった。これはきっと先生の教え方が良かったのだと思う。

S君：時間的にも合理的でしかも楽しく授業を進めてくれたので、好きでなかった数学が好きになりました。声も大きく後ろのほうまで聞こえ、また授業中生徒にすきを与えていなかったように思います。また、解答の間違ったところをなぜ間違ったか徹底的に解るまで教えてくれたのが大変良かった。

2 自己理解を深める学習カウンセリング

個人面接 あるいはグループ面接を通して、下記の項目について話し合っていくことにより、自己認知、自己理解へと深化していくわけである。それが、やがて、自己指導へと発展していくのである。

(1) 自己分析のための具体的なチェックポイント

表 1

指導の観点	主な指導内容	自己評価
1. 学習意欲の伸ばし方	1. 具体的な目標をたてさせる。 2. 好きなものから始めさせる 3. 結果を個人(集団)に知らせる 4. 適度にほめ、次の目安に示唆させる 5. グループ(個人)で競わせる 6. 成績をグラフにかいたり変化をもたらせるようにする 7. 周囲で神経をいらだせないように、また、あせらないようにさせる	
2. 学習計画のたて方	1. 自分のペースを考えるようにする 2. 学校行事や時間割りに合わせるようにする 3. 食事、入浴等の時間を考え、無理のない計画にする 4. 時間や教科内容等具体的な日課表にする 5. 平常時と休暇中の計画は区別して考えるようにする 6. 3年間を見通したものを考えるようにする	
3. 計画の実行	1. 「きょうは洋画のテレビがあるから」という例外を認めない 2. 時間通りに(早めに)勉強を始める 3. 机に向かったならば、すぐ勉強に取りかかる 4. 予定されている教科から勉強する 5. 集中的に勉強して予定時間内に終える	
4. 勉強の時期・時間	1. 起床から登校、帰宅から夕食、夕食から就寝まで、これらの調和をとる 2. 勉強時間と休憩の取り方を考える 3. 疲労回復のための息抜きの仕方を考える	
5. 授業の受け方	1. 勉強の基礎をつくる 2. 予習を必ずして授業を受ける 3. 復習は早めにする(参考書や問題集等で) 4. 精神を集中して、積極的な態度で望む 5. その先生の授業の“波”にのる 6. 授業で習ったことは、その時間内に理解するようにつとめる	
6. 本の読み方	1. 目的によって変える 2. 5段階読書法 概観する一設問する一読む一復唱する一復習する 3. 教科書と併用して参考書・問題集を利用する 4. 一冊の参考書は3回以上読む	
7. ノートの上手な取り方使い	1. 重要なことを聞きおとさないように聞く練習をする 2. 自分のことばをかくようにする 3. 授業のとき、教師の話の要点をまとめ、ポイントをメモする 4. 内容を区別して、箇条書きにする 5. 図や表に書くようにすると早く覚えらる 6. 色分けや下線をつけて、鮮明な印象を与えるように書く 7. 余白をあけて、ノートを取り、あとで補足するようにする 8. ノートはときどき復習してみるようにする	
8. 覚え方・考え方の工夫	1. 「これだけは覚えよう」と積極的な気持ちを持って反復する 2. 注意を集中して覚えるようにする 3. 意味を理解すること、丸暗記はさける 4. 連想の原理を応用する 5. 自問自答すること、自分でテストをしてみる 6. 問題をよく読み、問題の要点をはっきりさせる 7. 前に学習したことを応用するとよい 8. 分析した条件を組み合わせて、解き方を工夫する 9. 一つの解き方にこだわらない 10. 応用力をつけるようにする	
9. 家庭の環境の生かし方	1. 部屋のとり方 ・個室が望ましい ・静かなところを選ぶようにする ・日当たりがよい部屋を選ぶようにする 2. 照明と採光 ・明かりの強さを考える ・反射光を利用する間接照明がよい 3. 温度 ・温度、湿度を考えるようにする ・冷暖房についても考慮する	

	4. 装飾と色彩 ・勉強部屋の壁の色、カーテンの色、机の色などを考える 5. 心理的な環境についても配慮する	
10. 学校の環境の生かし方	1. 学校に対する生徒の認知と学校成績 2. 教師の生徒理解と学業成績 3. 友人関係と学業成績	
11. その他	1. 生活を規則正しくする 2. 健康に注意する 3. 不安を取り去る 4. 環境を整える 5. 勉強時間を小さくする 6. 心の中のわだかまりを取り去るようにする 7. 長所を認める 8. 無理な要求はしない	

月 日	学習カウンセリングの記録

3 授業改善の視点と評価

(I) 授業改善の視点

下記の表3は授業改善の視点として、9項目67観点を作成（1975年）したものである。

評定（自己採点）として、A、B、Cの3段階で採点し、下記の欄に記入し、各段階における評価率を出す。このような自己分析をすることによって授業改善を図る。（分析表1）

また、評定の目安を次のように定め自己評価を行うことも可能である。（分析表2）

分析表1	分析結果
Aの合計	$A/67 = () \%$
Bの合計	$B/67 = () \%$
Cの合計	$C/67 = () \%$

分析表2	観点項目	評定
1	60個以上	5
2	(59～50)個	4
3	(49～40)個	3
4	39個以下	2

表3

項目 (1) 学習に興味をもたせる	評価の観点	評価		
		A	B	C
(1) 学習に興味をもたせる	1 習熟の度合いに応じた具体的な課題を与えているか。			
	2 成功・達成感を味わわせているか。			
	3 段階を追って指導しているか。			
	4 生徒の特性を引き出し、つねに賞讃し伸ばしていくようにしているか。			
	5 自分から進んで問題を発見するよう、つねに問題意識を持たせているか。			
	6 発見学習を進める中で、本人を認めてやっているか。			
	7 生徒の発言は、つとめて取り上げるようにしているか。			
	8 生徒が興味を持つ教材・教員について工夫しているか。			
	9 授業の中にユニモアがあるように工夫しているか。			
(2) 注意力・集中力をつける	1 身体的欠陥を除去しているか。			
	2 生育歴・家庭環境や交友関係を把握し、問題発見につとめているか。			
	3 学習のつまずきを発見し、援助・指導しているか。			
	4 学習内容・目標をばきりつかせているか。			
	5 生徒の思考過程を大切に、途中で批判しないようにしているか。			
	6 教師の発問を多くし、適切な指名をしているか。			
	7 適切な賞讃や励ましを与えているか。			
	8 動的な学習に工夫しているか。			
	9 思いやりのある学習集団をつくっているか。			
(3) 自主的な学習態度を養う	1 つとめて自信をつけさせ、やる気を起こさせているか。			
	2 劣等感を持たせないように注意しているか。			
	3 “自ら学ぶ”という姿勢を育てているか。			
	4 過保護をやめ、自分のやるべきことは自分でできるようにさせているか。			
	5 習熟度に応じた課題を与え、満足感や達成感を味わわせているか。			
	6 学習方法を具体的に指導、援助しているか。			
	7 “自分にもやれたのだ”という経験をより多く持たせているか。			
	8 一人ひとりを大切に、”とりえの発見”につとめているか。			
	9 興味・関心の強いものから手をつけさせ、自信を持たせ、他に及ぼしているか。			
(4) 感動を与える	1 刺激や興味など新鮮なものを与えているか。			
	2 一人ひとりがねらいをもち、自ら学習する喜びを持たせる工夫をしているか。			
	3 生徒の思考活動を活かすに、これに即して授業をすすめているか。			
	4 つねに綿密な指導計画をたてて授業にのぞむようにしているか。			
	5 個別指導を重視し、それぞれのつまずきを早期に発見し、診断しているか。			
	6 生徒はつまずいたり思考錯誤したりする。そのたびに励ましや適切な助言を与えて最後までやり通しているか。			
	7 授業を通して、人間として行き方を話してやっているか。			
(5) 強い意志を育てる	1 創造することのよさを味わわせているか。			
	2 学習の目標を明確にし、その遂行や解決の手だてを工夫させるようにしているか。			
	3 解決の喜びは達成感を与え、自信を持たせて次の課題への意欲を持たせているか。			
	4 課題を精選して少なく与え、途中で投げ出さないようにして達成させているか。			
	5 “できるだけ反復練習させ、持久力を養っているか。”			
(6) 達成感を味わわせる	1 やる気を阻害している原因を分析し、よき話し相手となっているか。			
	2 つまずきの原因を正し、個別指導をしているか。			
	3 具体的な目標をたてさせているか。			
	4 学習の手順・方法を身につけさせて、学習成果をとりえさせているか。			
	5 障害を克服する方法を示させたり、温かく励ましたりしているか。			
	6 家庭と緊密に連絡をとり、家庭学習の定着化につとめているか。			
	7 グループ学習等により競争させたり、互いに助け合ったりするようにしむけるなど学習に変化をもたせているか。			
(7) 劣等感をとりぞく	1 感動をこめて生徒をほめてやっているか。			
	2 生徒の力を正しく評価し、その生徒に適した援助をしているか。			
	3 生徒のできた段階まで、“ここまでよい”と認めてやっているか。			
	4 生徒の習熟度に応じた作業を意図的に与えて、成功・満足感を味わわせているか。			
	5 授業中の自分の話し言葉に注意しているか。			
	6 ホームルームに心を開いて話のできる雰囲気をつくっているか。			
	7 到達度が低くても、アイディアにより生徒がいることに注意・発見に努めているか。			
	8 失敗にも笑わないで励ましあう雰囲気をつくっているか。			
	9 生徒の心を傷つけるようなしかり方をしないようにしているか。			
(8) 応用力をつける	1 基礎的・基本的な学力を身につけさせているか。			
	2 それを活用し、応用する学習場面を構成しているか。			
	3 応用する態度や方法を身につけさせているか。			
	4 “学んだことを記憶させ、記憶の再生ができるまで訓練を徹底しているか。”			
(9) その他	1 学習の過程で、想像的思考をする時間を与えているか。			
	2 生徒は教師の気遣いに動かされているというこを常に認識して指導しているか。			
	1 生徒を生成的存在としてみているか。			
	2 妥当性と信頼性をもち、しかも生徒が解答したくなるような見易くて愛情のこもったテスト問題の研究・作成につとめているか。また、答案分析をしているか。			
	3 テストの答案・提出物等に何か書いてやっているか。			
	4 専門以外の一般的教養も身につけるように心がけているか。			
(9) その他	5 心身ともに健康で情緒が安定しているか。			
	6 生徒にとって、“教師は運命”であることを自覚しているか。			

(2) 児童生徒から見た授業評価と自己評価

表 4

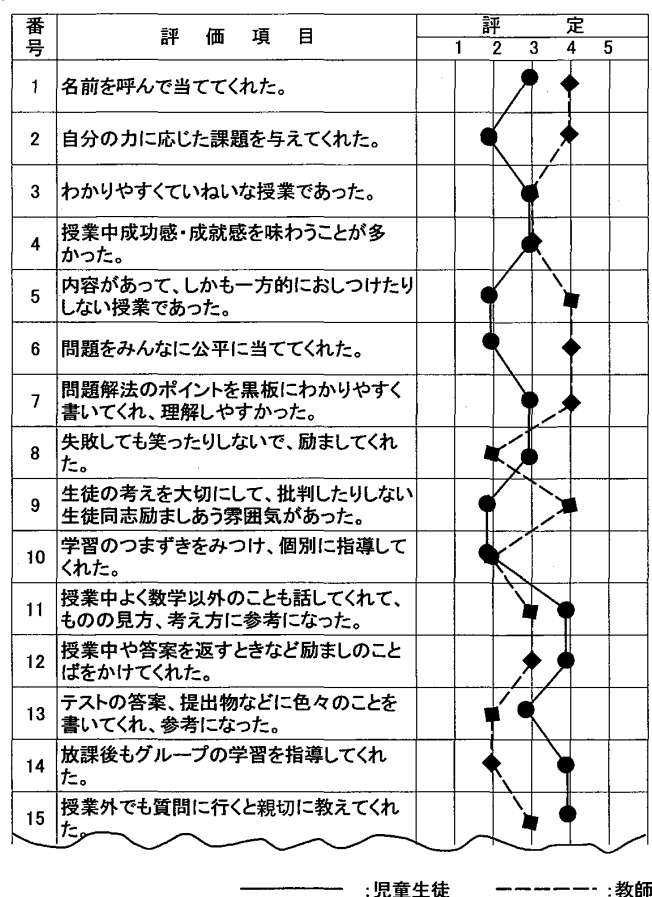


表 4 は、実線が児童生徒の評価、点線は教師自身の評価である。例えば番号 1, 2, 5, 6, 7, 9 は教師自身の評価より児童生徒の評価が低い項目である。一方、番号 8, 11, 12, 13, 14, 15 は教師自身の評価より、児童生徒の評価が高い項目である。また、3, 4, 10 番は一致した結果となっている。特に児童生徒の評価と教師の評価のずれの大きい項目について、分析することによって、授業改善に役立つのである。

この評価項目は、前表 3 の評価の観点の文章の語尾を変えることによって、児童生徒から見た授業評価ができる。例えば、「成功感・成就感を味わわせているか」を「授業中成功感・成就感を味わうことができたか」と変えることによって評価項目を作成することができる。

4 授業対話と児童生徒の反応

S：先生、ぼく、もう数学の勉強をしないうもりです。学校もやめちゃいたいくらい。

T：（沈黙のまま、考えている）

S：三時間も図書館で勉強したのに、さっぱりわからない。中間試験も悪かったし……

T：うーん、期末試験も近いし、不安なのかな……

S：そうなんです、このままなら進級できないと思う……

T：うーん、進級のことね……解らないところ沢山あるのかな……

S：試験の範囲をもう一回整理してみます。今日はじめて図書館でやっただけなので……

T：うーん、そう……

S：家に帰って、もう一度やって、解らないところ整理してきますので、その時先生教えて下さい。

T：うーん、そうだね。

S：それじゃ、先生、明日よろしくお願いします、さようなら……

T：解ったよ、じゃー、明日待っているよ……

(1) 受動的な聴き方

上記カウンセリングの様子から解るように、受動的な聴き方、何も言わずに耳を傾ければ、

「受容している」と相手に伝えることになる。沈黙は、「ことばを使わない強力なメッセージ」である。教師が一方的に話し続けると、生徒は悩みを打ち明ける機会がなくなり、また、話す気持が薄れてしまう。

承認を表す反応、沈黙して耳を傾ければ、コミュニケーションを妨げる言い方は避けられる。しかし必ずしも、相手に受容されていると感じるわけではない。そこで教師が「聞いているよ」と相手に伝える、手が必要である。これを「承認を表す反応・態度」という。

例えば、うなずき、微笑、身乗り出す、あるいはことばなどで生徒に伝えることである。心の扉を開くことば、教師は生徒に、もっと詳しく話してほしい、と思うことがある。そんなとき、どんな話しかけをするか、例えば、「差し支えなかったら、そのことを、もっと話してくれますか」「進級のことが、すごく気になっているようですね」「うん、もっと続けてかまいませんよ」「君はもっとそのことを、話したいんじゃないのかな」「解らないところが沢山あるのかな」などと語りかけることが大切である。

(2) 能動的な聴き方

- T: 君が遅刻するので、私は困っているんだ。君が遅れて入ってくると、何をしても中断しなくちゃならない。気が散っていらいるんだ。
- S: はい。でも最近やることが多くて、間に合わないことがあるんです。
- T: そうかい。君は最近、何か新しい問題をかかえているんだね。(能動的な聴き方)
- S: そうなんです。三時間目の科学の先生から、四時間目の実験の準備を手伝ってくれて頼まれたんです。先生、わかるでしょう。大変な仕事なんです。
- T: 君は先生の手伝いを頼まれて、とてもうれしかったんだね。(能動的な聴き方)
- S: そのとおりなんです。たぶん来年は、ぼくが実験室の助手になれると思ってます。
- T: そうすれば助手手当ても出るから、大切なことなんだね。(能動的な聴き方)
- S: そうなんです。ぼくが遅刻して先生が腹を立てるのは、わかっているんです。でも、これほど大問題だと思っていませんでした。静かにこっそり、教室に入ろうとしたんです。
- T: 君が静かにこっそり入ってきて、私にとっては問題だ。そのことを知って、君は驚いたんだね(能動的な聴き方)
- S: 先生の言われることはわかりますけど、遅刻の話はもうよしてください。ぼくが遅れるのは、科学の先生と長話になるからなんです。それが問題だと、科学の先生に言います。もっと早く、話を切り上げます。
- T: そうしてくれると助かるよ。ありがとう。
- S: そんなこと、わけもないです。

(3) 対決的な聴き方

- T: 君が遅刻するので、私は困っているんだ。君が遅れて入ってくると、なにをしても中断しなくちゃならない。気が散っていらいるんだ。
- S: はい。でも最近やることが多くて間に合わないことがあるんです。
- T: それはわかるが、君の遅刻に目をつぶるわけにはいかないんだ。邪魔されてばかりではいけないんだ。
- S: 先生がどうして、こんなことを大げさにとりあげるのか。ぼくにはわかりません。二、三分授業に遅れただけじゃないですか。
- T: そんなこと言うとは、私は君に、まったくわかってもらってないようだね。
- S: あてつけがましいこと言わないで下さい。ぼくが遅刻しても無視してください。そうすれば問題ないでしょう。
- T: 私に命令するんじゃない。君が今後、時間どおりにくればいいんだ。
- S: (怒って出ていく) ひどい先生だ。

(1)のような対話には、生徒が一方向的に話すことが多い。あまり先生とのやりとりが少ない。自分のことばに教師が耳を傾けていることは解るが、本当に先生が理解してもらえたかどうかは、知ることが少し難しい。

(2)の対話では「君が遅刻するので、私は困っていることを伝える」(問題を指摘する)、「…何か難しい問題をかかえているんだね」(能動的な聴き方)、このような対話によって、教師の問題が生徒が自分の問題として受け入れていくことになる。

(3)のような対話になると、信頼と尊重の上に成立する本来的な「対決」ではなくなり、話はものわかれになってしまう。

IV ま と め

この学習カウンセリングを生かした授業研究の動機は、10ページでふれたように、学期末には「反省と展望」ということで書いてもらうことにしていた。その中の項目に「授業について」があり、「あなたは授業中、どんな言葉をかけられたとき、学習意欲がわいたり、または学習意欲がなくなったりしますか。質問や応答の中で、テストを返すとき、その他授業で先生の言う言葉を具体的に書いてください」という項目を設定している。

その一部を紹介すると、学習意欲がわくときー「君はがんばったね……」といってテストを返してくれる先生」「なるほどよくできたね……」と言ってくれる先生」「ここを気をつければもっともっとよくなるよ……」と具体的に教えてくれる先生」「名前を呼んで当ててくれる先生」。

学習意欲がなくなるときー「これは絶対できないといって教える先生」「バカ、そんなの当たり前だよ……」「まあ、ザルに水を入れているようなもんだな……」「おまえに質問しても……」といって次の人に当てる」「まあ、人形に話しているようなもんだな……」「A高校生に比べたら月とスッポンだな……」などと、「学習意欲がなくなることば」が具体的に多く出てきたことは予想外であった。教師の一言が学習不適応生徒を作っていることになる。

相談的な人間関係の成立した授業を創造することは学習不適応の生徒ばかりでなく、より多くの生徒たちの人間形成や精神的健康の回復に役立てられるのではないかということが研究の仮説であった。教師自身の自己変革を通して授業改革を目指すことは教師生命の基本である。

参 考 文 献

- 1) 小林純一著：カウンセリング序説 金子書房 1979.
- 2) 島村輝雄：学校におけるカウンセリングの役割 大阪心理出版 1982.
- 3) 平木典子・巖岩秀章編著：カウンセリングの基礎 北樹出版 1998.
- 4) 市川伸一編著：学習を支える認知カウンセリング ブレーン出版 1997.
- 5) 松原達哉編著：学校カウンセリング援助と指導の基礎基本 学事出版 1999.